

# 霊宝館だより

題字・倉野光義師

霊宝館だより 第128号

平成30年10月7日発行  
和歌山県伊都郡高野町高野山306  
公益財団法人高野山文化財保存会  
高野山霊宝館  
電話0736-56-2029  
URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

- 開館時間
  - 5月1日～10月31日 8時30分～17時30分
  - 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
- 休館日
  - 年末年始のみ
- 拝観料
  - 大人 600円
  - 高・大学生 350円
  - 小・中学生 250円
- 専用駐車場あり
  - 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。



伽藍金堂 不斷経にて 毎年八月七日より一週間行われる法会「不斷経」の期間のみ、この青磁香炉と香木が奉安されます。(秋期企画展で展示)

## 第128号 目次

- 秋期企画展のご案内……………2～3
- 新指定品の紹介……………4
- 高野山の古建築第三十二回……………5
- 特集友の会文化講座の報告……………6～7
- 高野山の考古学(二十)……………8～9
- 高野山の文書(十五)……………10
- 高野山霊宝館からのご案内……………11
- 霊宝館の庭園45……………12

## 秋期企画展 「“香り”の<sup>しょうこん</sup>荘嚴

10月13日(土)～  
平成31年1月14日(月・祝)

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり! ホームページ割引券もご利用ください

平成30年度 秋期企画展

「**香り**」の**莊嚴**しょうごん

平成30年10月13日(土)～平成31年1月14日(月)祝まで

前期 平成30年10月13日(土)～11月25日(日)

後期 平成30年11月27日(火)～平成31年1月14日(月)祝

休館日…12月28日(金)～1月4日(金)

※期間中、一部展示替を行います。

※関西文化の日に協賛し、11月12日(月)を無料開館日とします。



国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺



国宝 阿弥陀三尊像 蓮華三昧院 (前期)

仏教と「香り」、という身近なところでは線香や焼香、また高野山では奥之院御廟前の線香の煙や、大塔を内拜するときの塗香を思い浮かべる方もおられるかと思えます。インドを起源とする仏教や密教において、「香り」はほとけさまを供養し喜ばせる、ほとけさまの空間を莊嚴する(飾る)、あるいは清めるなど、さまざまな役割を担っています。その歴史は非常に古く、日本における「香り」の文化は、仏教伝来以降、発展していきました。本展では、仏教・密教における「香り」の役割に注目し、高野山に伝わる「香り」に関わる宝物を展示いたします。

主な展示品

彫刻

国宝 諸尊仏龕

重文 釈迦如来及諸尊像(枕本尊)

金剛峯寺

普門院

絵画

国宝 阿弥陀三尊像

重美 星供曼荼羅図

蓮華三昧院 (前期)

親王院 (前期)





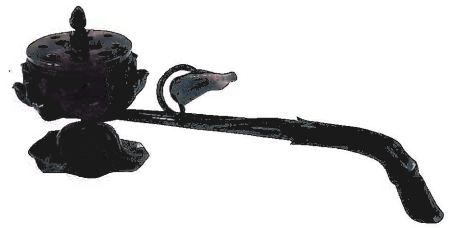
重文 五部心観 西南院〔後期〕



香炉 (桃園天皇遺品) 金剛峯寺



香合仏 (普賢・文殊) 竜光院



重文 蓮華形柄香炉 竜光院

重文 阿弥陀浄土曼荼羅図  
重文 五部心観  
未指定 西界曼荼羅図 (伝真言院曼荼羅模写)  
未指定 釈迦三尊十六羅漢像  
重文 西禅院〔後期〕  
西南院〔後期〕  
金剛峯寺  
竜光院

■書跡  
国宝 紺紙金銀字一切経  
金剛峯寺

重文 紺紙金字一切経 (荒川経)  
重文 紺紙金字法華経  
未指定 香之記  
金剛峯寺  
金剛峯寺  
金剛峯寺  
〔期間中展示替あり〕

■工芸  
重文 蓮華形柄香炉  
未指定 青磁大香炉 (不断経用)  
未指定 三葵紋入方形香炉  
未指定 香盆并香具 (桃園天皇遺品)  
竜光院  
金剛峯寺  
金剛峯寺  
金剛峯寺

■考古  
県指定 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具のうち賢瓶と内容物  
※期間中、展示替えを行います。  
※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。  
金剛峯寺

同時開催 特集展示

成慶院本高野大師行状図画くお殿様の描いた弘法大師絵巻く

※ミュージアム法話

(お坊さんによる法話と展示解説)

10月20日(土)  
13時より 約45分間

※ミュージアムトーク

(学芸員による展示解説)

11月23日(金)祝  
13時30分より 約60分間

※予約不要、参加費無料(要拝観料)

### 新指定文化財の紹介

## 重文 紺紙金字法華経 八卷

高麗時代 太康七年（一〇八一） 金剛峯寺

縦二九・七cm 全長一〇一三・八〜一三三六・〇cm

「紺紙金字法華経」（金剛峯寺蔵）が本年度、国指定重要文化財（美術工芸品（書跡・典籍））となります（平成三十年三月九日答申）。



紺紙金字法華経



紙背

### こうやくんの豆知識



## 「法華経」ってなあに

「法華経」は仏教經典のひとつで、「ほけきょう」「ほつげきょう」と呼ばれています。

法華経には誰でも成仏できるという仏教の根本的な思想が説かれています。法華経を唱える仏教宗派はたくさんありますが、その中でも天台宗や日蓮宗は特に法華経を重んじます。

法華経は二十八のセクションに分かれていて、前半の十四セクションを「迹門」後半を「本門」と呼んでいます。この二門はお釈迦さまのありかたの違いにより分類されたもので、お釈迦さまはこの世に現れる久遠の昔に悟った本体があり、お釈迦さまの根本は絶対的な存在である仏教の悟りであるとする「本門」と、悟りを開いたお釈迦さまが人々を悟りの境地に導いたとする「迹門」に分けられています。しかし、全体を通して説かれているのは「人々は平等に悟りを得ることができると」という仏教思想の原点であり、お釈迦さまが弟子にやさしくわかりやすく説かれた内容が記されています。

高麗国（現在の朝鮮半島）太康七年（一〇八一）六月に金山寺の重職を務めていた成元が発願し、書写させた妙法蓮華経（法華経）で、現存する高麗経としては本年度に国宝指定となる統和二十四年（一〇〇六）の「紺紙金字大宝積経卷第三十二」（京都国立博物館蔵）に次いで、世界で二番目に古いものです。

巻首には国宝「紺紙金銀字一切経」（金剛峯寺蔵）など日本の古写経にみられる「見返し絵」に比べると、かなり横幅が広い画面に釈迦説法図などが描かれています。これらは法華経の各巻の内容を描いたものです。

また紙背全面に銀泥で宝相華唐草文が描かれており、この文様については二〇〇三〜四年にかけて、京都国立博物館や東京国立博物館など全国四館を巡回した「空海と高野山」展図録の表紙に使用されたので、記憶のある方もおられるのではないのでしょうか。この展覧会で展示・紹介される以前はほとんど知られていなかったもので、全八巻が欠けることなく完本で伝わっていることも貴重です。（福形安希子）

※秋期企画展「香り」の荘厳」で展示します（通期）。



連載

高野山の古建築 第三十二回

重要文化財

金剛三昧院 四所明神社 本殿

鳴海 祥博



社殿正側面の全景 形式は「一間社春日造り」。正面の柱間は1.2mと小規模だが、様式、技法ともに正規の造りである。土台建て、持送り形式の縁は奈良春日大社の技法を取り入れたのだろうか。



四所明神社の正面遠景 鬱蒼とした山の中腹に、瑞垣に囲まれて社殿が建つ。



「身舎」正面の詳細 「身舎」の正面には虹梁が架けられその下は開放となっていて、社殿の扉は奥まった位置に設けられている。扉上の墓股には魚の彫刻が彫られ、「登竜門」を暗示しているようだ。



組物と軒の見上げ 「身舎」と「向拜」を湾曲した「海老虹梁」で繋ぎ、その曲線をうまく利用して、春日造り独特の複雑な軒廻りを巧みに納めている。木鼻は少し大振り、丁寧な造りとなっている見応えがある。

お大師さまが高野山を開いたとき、高野山と密教の護り神として、丹生明神と高野明神を壇上伽藍に勧請したことから、山内で厚く信仰されるようになった神様です。十三世紀末に描かれた「高野山水屏風」の金剛三昧院と推定される部分を見ると、多宝塔の後ろ側、本堂の左脇に社殿が描かれていて、現状の建物配置を彷彿とさせます。違うのは、社殿の前に拝殿の

ような建物が描かれていることで、院内でも主要な建物であったこと、そして鎮守社として古い歴史を持っていることが窺えます。現在の社殿は、建物に記された墨書きから室町時代の天文二十一年（一五五二）に建てられたことが明らかとなっています。「一間社春日造り」という形式で、正面の柱間が一・二m程の小さな建物ですが、建築としての様式や技法は隔々まで正規な造りとなっています。

社殿の正面と左右には縁が付きませんが、この縁は社殿の柱に持送りの材を取り付けて、持ち出すように付けられています。小さい建物だからこのようにしたとも思えますが、「春日造り」のルーツである奈良の春日大社本殿がこのような形式なので、一概に略式とはいえないようです。社殿の本体部分である「身舎」と、「向拜」という正面の底部分を、大きく湾曲した「海老虹梁」で繋いでいるのも特徴的です。「海老虹梁」は鎌倉時代に中国から伝来した様式で、その形の斬新さから室町時代以降に広く普及する

の本堂に向かう石畳の途中、左手の一段高い位置に校倉造りの「経蔵」があります。その経蔵の右手には急峻な山裾が迫っていて、その斜面を少し登ったところに、瑞垣で囲まれた小さな社「四所明神」社が鎮座しています。「四所明神」とは、丹生明神、高野明神、気比明神、丹生御息（巖島明神）の四柱の神様のことで、かつらぎ町上天野にある丹生都比売神社のご祭神です。

社殿の正面と左右には縁が付きませんが、この縁は社殿の柱に持送りの材を取り付けて、持ち出すように付けられています。小さい建物だからこのようにしたとも思えますが、「春日造り」のルーツである奈良の春日大社本殿がこのような形式なので、一概に略式とはいえないようです。社殿の本体部分である「身舎」と、「向拜」という正面の底部分を、大きく湾曲した「海老虹梁」で繋いでいるのも特徴的です。「海老虹梁」は鎌倉時代に中国から伝来した様式で、その形の斬新さから室町時代以降に広く普及する

のですが、ここでは屋根の勾配に合わせても自然に組み込まれています。身舎の正面には虹梁型の頭貫を架け、柱間を開放とし、その奥に扉を構えているのも斬新です。このような構えは大阪の河内長野周辺の室町時代の社殿に見受けられます。また柱の頂部には、外に飛び出す「木鼻」という部材が付いています。その輪郭、姿形の似たものが、同じく河内長野周辺の建物に見ることが出来ます。この社殿を建てたのは河内の大工さんではないだろうか、そんなことを想像させる造りです。社殿には墓股が付けられ、そこには牡丹、蓮、獅子の彫刻が彫り出されています。中でも身舎中央の扉の上の墓股に、魚の彫刻があるのは注目です。建築彫刻に魚を用いた室町時代の数少ない例です。波間から飛び跳ねた魚は「鯉」で、「登竜門」を表しているのです。



特集

高野山霊宝館友の会文化講座  
 「高野山戦国武将の石塔群」  
 イベント報告



伊達政宗五輪塔



淀殿・豊臣秀頼五輪塔

高野山霊宝館友の会では、平成三十年八月二十六日(日)、第三十九回大宝蔵展「高野山の名宝 もののふと高野山」の開催にちなみ、文化講座「高野山戦国武将の石塔群」を開催いたしました。講師に、木下浩良高野山大学総合学術機構課長を迎え、高野山にゆかりのある戦国武将の石塔について詳しくお話いただき

ました。

高野山大学での講義のあと、実際に奥之院参道を歩き、石塔を目の前に詳しい解説を受けました。今回は特別に、未発表である最新の研究成果もご披露いただき、参加された会員の皆様は、熱心に聞き入っておられました。

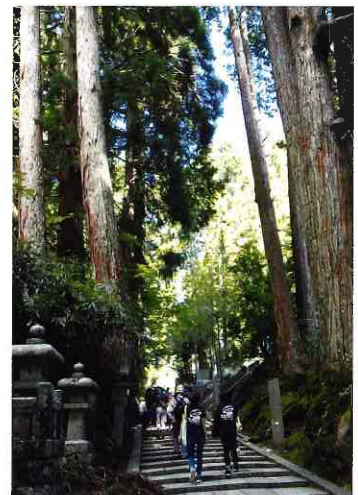
今回この講座でお話くださった内容をご寄稿いただきましたので、次頁にてご紹介いたします。

◎友の会会員募集

- ・ 会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- ・ 年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

- 一般会員(個人) 3,000円
  - 賛助会員(法人) 30,000円
- 皆様のご入会をお待ちしております。



かくはんきか 覚鑿坂にて



# 高野山における巨大石塔出現の胎動 —石田三成五輪塔—

高野山大学総合学術機構課長 木下 浩良



石田三成五輪塔

高野山奥之院には三〇万とも四〇万ともいわれる石塔が、鎌倉時代から現代に至るまで造立されている。在銘品の数は鎌倉時代で九二基、南北朝時代のもので一七九基、室町時代から慶長末年（一六一五）までで一六九八基を数える。実に、都合一九六九基という、二〇〇〇基にもならないとする中世の在銘石塔の多さは、我国でも随一である。

ただ、室町時代の石塔の多さの一方で、石塔自体の大きさは小型化する傾向にあった。別石で造られる五輪塔も、室町時代前期のもの総高は六〇cm程度と推定される。そして、室町時代中頃になるとさらに小型の三〇cm～五〇cmの方柱状の一石を五輪塔形に刻んだ、いわゆる一石五輪塔が出現する。室町時代後期になると、奥之院におけるほとんどの石塔は一石五輪塔が凌駕する。まさに同時期は一石五輪塔が造立された時代であった。

塔が複数奥之院において出現する。それが、吉川元春・元長親子五輪塔（天正十四年・同十五年在銘）、河野通直・同母五輪塔（天正十五・十六年在銘）、小早川隆景・同夫人五輪塔（天正十六年在銘）、石田三成五輪塔（天正十八年在銘）である。まさに、豊臣秀吉による天下統一の過程で、江戸時代初期の元和・寛永期に出現する巨大石塔の胎動とも言える動きが、高野山奥之院において見られるのである。

中でも注目されるのが石田三成五輪塔である。総高は二七〇cmで、天正十八年（一五九〇）までの高野山の石塔の中では最大の大きさである。銘文は、「天正十八庚寅、宗應

逆修、三月十八日」とある。宗應とは石田三成の法名である。三成の生年は永祿三年（一五六〇）とされるので、高野山に五輪塔を造立した時の三成の年齢は三十歳である。生前葬の逆修供養として造立した五輪塔であ

る。天正十八年頃の三成の所領は、四万石程しかなかった。財政的な面だけだけでなく、三十歳という壮年期にもかかわらず、それまでにない大型の五輪塔を造立した理由はわからないが、三成の弘法大師信仰に厚かった一面を今に伝えている。

さらに石田三成五輪塔で注目されるのが、原石から石材を切り出す際に残る矢穴の跡が地輪と火輪部分に見られることである。このことは貴重で、高野山の石塔においては他に類例を見ない。おそらく、このような巨大石塔を造立するケースが、それまでに無かったことを今に伝えているのではなからうか。それと、矢穴は正面からは見られないような工夫がなされている。地輪部分は背面に見られ、火輪部分には側面に見られる。これもあくまで推定の域ではあるが、矢穴の跡を削ってしまったことは、石塔自体の大きさが小さくなることに対する思いがあったのではなからうか。さらに言うと、この大きさを保つために、石田三成自身が、五輪塔造立に際して指示をしたのではなからうかと思うがいかがであるうか。

この石田三成五輪塔についての詳細な紹介と考察については、近く公にすべく準備をしている。公表の際には、本誌においても私見を披露させていただきます。



石田三成五輪塔（正面）



背面矢穴（地輪、赤丸内に3カ所）

# 石塔の銘文を読む②

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

今回は同じ日に造立された五輪塔を観察してみたいと思います。ここでは仮に、一人の名前が記されるほうをA塔、二人の名前が記されるほうをB塔と呼んでおきます。

## 石塔の観察

まずA塔(図1)について概要を記します。石塔は砂岩製五輪塔の地輪部分で、現在霊宝館に保管されています。高さ二二・二センチ、幅

二八・〇センチ、上面には直径七・〇センチの柄穴ほそがあり、水輪と重なっていたことが分かります。地輪の下辺は直線的で、裏面は鑿痕のみが明瞭に残り、わずかに中央が窪んでいますので、専用の台座があった可能性

があります。地輪の正面に銘文があり、「越中国利波郡住人／金剛佛子阿入／(梵字アン)／元應二年甲庚／八月時正造之」(／は改行)と読めます。現代語に読み替えると「越中国利波郡とをみ現在の富山県砺波市は



図1 A塔の拓本(1/5)と写真



図2 B塔の拓本(1/5)と写真



か\*の住人、金剛佛子阿入（の石塔である）。元応二年（一二三〇）八月時正（秋分＝彼岸日）にこれを造る」。金剛佛子は密教の灌頂を受けた人のことを指します。

これだけなら、よく見かけられる石塔の銘文と特に変化のないものなのですが、次のB塔の銘文と比較すると興味深い造立背景が見えてきます。

B塔（図2）は奥之院の御供所前にあつたもので（現在は霊宝館保管）、やはり五輪塔の地輪部分です。高さ二二・〇センチ、幅二八・〇センチの砂岩製で、上面には直径六・八センチの柄穴があり、底部の調整もA塔とよく似たものですから、台座の存在を想定させます。銘文もA塔同様に地輪の一面にあり、「越中国利波郡住人／兵庫助入道道仙／并比丘尼正音（梵字アン）／元應二年<sup>申庚</sup>／八月時正造之」（〽は改行）と読めます。現代語風に表現すると「富山県砺波市ほかの住人である兵庫助入道道仙と比丘尼正音が、元応二年（一二三〇）八月秋分にこれを造る」と読めます。入道と比丘尼はともに出家した人を指しますが、兵庫助と現世での肩書が記されていますのでおそらく生前の造立と思われる。道仙と並ぶ正音もおそらく生存しており、しかも男女の名前を並

べていますから二人は夫婦なのでしょう。

生前に自身の塔を建立したと考えると、これは逆修による造塔と理解できます。逆修とは、生前に死後に修すべき仏事を行っておくことで、死後に行ってもらいよりも功德が優れているという考えです。平安時代にはすでにみられますが、鎌倉時代に入って増加する供養法です。

### 石塔の比較と意味

A塔とB塔を比較してみましよう。まず形態ですが、石材や寸法、形状は両者ほぼ同じもので、正面中央に記載される梵字「アン」の書体や大きさもそっくりです。銘文の記載方法も梵字の右に（一人と二人の違いはありますが）被供養者の名前、左に造立の年月日を二行に分けて記載する点も同じです。しかも両者は同じ富山県砺波郡の人ですから、二つの石塔は一对で造営されたものと理解すべきです。

ここで少し想像を膨らませてみましょう。B塔に記された道仙と正音は夫婦だと想定しました。それを踏まえるとA塔の阿入は道仙夫婦と同じ日に供養されていますから、夫婦の親族と思われる、どちらかの親とみる

のが妥当でしょう。ここでは仮に道仙の父親と推定しておきます。この父の死を契機として、息子夫婦が自らの逆修供養とともに親の追善供養を行うため、わざわざ富山県から高山山まで、おそらく阿入の遺骨を抱いて出向いてきたのです。遠隔地から高山山へ訪れる、納骨の実態が見えてきます。

このように、親などの死亡を契機として自身や一族の供養を同時に行う事例は、他にも知られています。例えば、熊本県玉名市にある宇佐氏一族墓（図3）の事例では、文応元年（一二六〇）八月彼岸日に、自身



図3 宇佐氏一族墓の石塔（熊本県玉名市）

の極楽往生に臨んで卒塔婆（石塔）を造立する（逆修）のですが、その時に五年前と四年前に死亡した先祖を改葬して、ほぼ同じ形態と思われる石塔を建立し埋葬しています。この一連の行為によって、宇佐氏一族の墓地は整備されたとみられ、以後歴代の造塔が行われてゆきます。

これは、中世に地方の有力者（武士）層が、自らの「イエ」の永続性や継続性を主張して墓地を整備する一つの手法なのですが、今回の事例は地元での墓地整備にあわせて、高山山への納骨も行っていたことを示唆する貴重な事例になると考えられます。

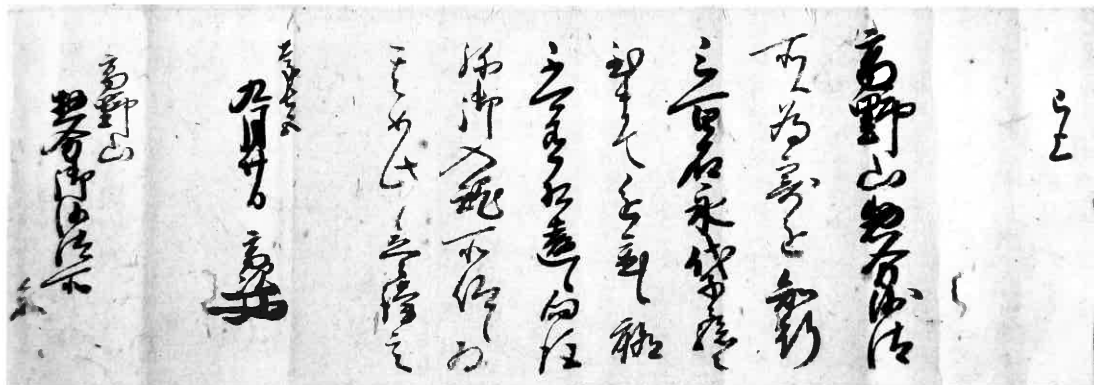
※利波郡は礪波郡とも書き、延喜式などにも登場する古い地名。現在は合併などの編成を重ねて、砺波市、高岡市、南砺市、小矢部市に利波郡の一部が含まれています。

#### 【参考文献】

巽三郎ほか一九七四『紀伊国金石文集』真陽社  
多田隈豊秋一九七五『九州の石塔 上巻』西日本文化協会

# 高野山の文書 (十五)

## 京極高次寄進状について



京極高次寄進状 有志八幡講

今回紹介する文書は「京極高次寄進状」(有志八幡講蔵)と呼ばれる文書です。その内容を訳すと、「高野山惣分沙汰所(行人方の執行機関)に所領三百石を子々孫々に至るまで、寄進することに相違ございません。今後ますます、親密にさせていただきますためこのように寄進します。恐れながら謹んで申し上げます。

〔翻刻文〕

已上

高野山惣分沙汰所へ為寄進知行  
三百石永代子々孫々  
至まで進置候聊  
不可有相違候向後  
彌御入魂所仰候為  
其如此候恐々謹言  
慶長五

九月廿日 高次(花押)

高野山

惣分御沙汰所

参

す。慶長五年(一六〇〇)九月二十日 高次 惣分御沙汰所へ。」となります。差出人である高次は、京極高次(一五六三〜一六〇九)のことです。近江国(現滋賀県)出身の戦国武将で、はじめ織田信長に、次いで豊臣秀吉、徳川家康に仕えました。高次の妻お初は、浅井長政、お市の方の娘で、淀殿やお江の方の姉妹として有名です。高次を歴史上有名にしたのは、関ヶ原の戦いの際に東軍に属し、西軍の大軍を近江国大津城(現大津市)で足止めしたことでした。それでも大軍に攻め続けられた高次は西軍に降伏し、高野山に隠遁しますが、のちに、大津城での足止めを家康に評価され、大名に戻りました。文書の差出日を見ると、慶長五年九月二十日です。大津城での降伏が同十五日で、家康に招かれたのが同二十三日とされるので、高野山にいた時に出した寄進状だと考えられています。

さて、この文書の写真をよく見ると、不思議な点が一つあります。それは、この文書の始めに「已上(以上)」とあることです。「以上」という言葉は、「〜」です。以上」のように文や言葉の後に付けて、これで終わりという使い方をするのが普通です。しかし、この文書では始めに用いられています。それは、現代で用いる「追伸」に関係があります。

昔の文書では、追伸は追而書や尚々書と呼ばれ、戦国時代から江戸時代前半ごろには文書の袖(前)に書く形式が一般的だったようです。この文書が「以上」ではじまるのはこの追而書がないからです。「追伸はありませんよ。」という意味です。もし、「以上」がなければ、文書が偽造される恐れのある時代だったため、偽造防止のために「以上」の言葉だけ書いたものなのです。

今回は、追伸を本文の前に書くという昔の習慣と、追伸はないですよということを伝えるために「以上」だけ書くという習慣から生まれた、現代人からすると見慣れない不思議な書き出しになってしまった文書を紹介しました。(研谷 昌志)

※秋期企画展では今回紹介した「京極高次寄進状」は展示いたしません。



# 高野山霊宝館からのご案内

## 各種イベント報告

◎博学連携事業 文化財ふれあい体験講座「金剛峯寺遺跡出土土器の接合体験」開催



7月30日(月)に高野山高校生とその保護者を対象として、埋蔵文化財の接合体験会を開催いたしました。文化財に触れることで身近なものとして感じていただき、その価値について考える機会になったかと思えます。同じ種類の陶器片を見つけるのに、苦戦しているようでした。

## ◎職場体験

8月6日(月)・7日(火)の2日間、高野山小学校の地域社会体験研修として、教諭1名を受け入れ実習を行いました。多岐にわたる業務の説明や文化財の取扱講習など、霊宝館や文化財への理解を深め、教育の現場で活用していただきたいところです。

## ◎台風被害報告

8月23～24日の台風20号と、9月4日の台風21号により、高野山内の指定建造物にも被害がありました。主な被害は国宝不動堂軒先の水切り鉄板の露出、重文上杉謙信霊屋の屋根の一部損傷など(20号)、重文徳川家霊台の一部部材と金具脱落・透扉屋根破損、重文大門二階扉破損、重文山王院本殿のうち丹生明神社の屋根破損など(21号)です。特に台風21号による被害は甚大で、山内各所で倒木や屋根の破損、停電などが発生し、霊宝館小宝蔵は倒木で屋根が損傷しました。



霊宝館小宝蔵屋根

## ◎ミュージアム法話・ミュージアムトーク 開催

大宝蔵展期間中、多くの方にご参加いただきました。写真は8月21日(火)開催のミュージアムトークの様子です。



## ◎宝物貸出・展示情報

◎和歌山県立博物館 特別展「西行」紀州に生まれ、紀州をめぐる」

平成30年10月13日(土)～11月25日(日) 国宝 高野山住僧等訴状(宝簡集巻27)

国宝 高野山古図写(又続宝簡集巻61)

国宝 荒川庄百姓言上状案(又続宝簡集巻85上)

国宝 南部莊莊官等年貢米起請文案(又続宝簡集巻96)

未指定 天野社絵図 以上 金剛峯寺 国宝 宝簡集巻23(円位書状・前齋院庁下文・五辻齋院寄文・春日局消息・三位局消息) 金剛峯寺

重文 高野山先哲灌頂記録(西南院文書巻11) 西南院 重文 阿弥陀如来及両脇侍立像 不動院



重文 阿弥陀如来及両脇侍立像 不動院

## ◎堺市博物館

企画展「堺・経典をめぐる文化史」 平成30年11月17日(土)～12月16日(日) 重文 雑阿含経卷第三十九

金剛峯寺 ※奈良国立博物館寄託品 ・期間中展示替あり。詳細は各博物館にお問い合わせ下さい。

## ◎ミュージアムショップ 新商品のお知らせ

八大童子をあしらったチケットファイルを制作、販売中です。美術館・博物館や社社めぐりのお供にいかがでしょうか。



閉じた状態で11.5cm×23.5cm ￥350

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

# カマツカ・鎌柄 ウシコロシ・牛殺し

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



初夏の花枝



秋の果実

カマツカはバラ科・カマツカ属の落葉低木・小高木です。

高野山では日当たりのよい林縁や山道ぞいの斜面などに生え、若枝、葉柄、葉の裏側、萼片などに白色の軟綿毛がやや多くみられる、ケカマツカも自生しています。

山頂部では五月初中旬、枝先に白い五弁花を房状につけ、こめばな(米

花)と呼んでいる地方もあります。

秋には果実が赤黄色に熟します。外見や、手に触れた感覚などから美味しそうです。口にしてみました。かすかな甘み、酸味が感じられるといった程度でした。

かまつかぐみ(鎌柄菜莢)、うまぐみ(馬菜莢)、とりのみ(鳥の実)などと呼んでいる地方もあるそうです。

この樹の和名・カマツカの命名の

由来は、硬くて強靱な幹材を鎌の柄

に用いたことによる、というのが定説となっています。鉦の柄にも用いたので、なたづかの方言名もありました。

この樹の別名はウシコロシ、「牛殺し」の字が当てられています。この樹に牛を殺すほどの有毒成分が含まれているという理由からではありません。

現在、牛は主に肉牛、乳牛、観光

用などとして飼育されていますが、往時は農耕、物資の運搬などに使う役牛が飼われていました。役牛が暴れたり、勝手なことをしたりしないよう制御するため

の鼻輪や鞭に、この強靱な幹や枝を用いたことによる命名だそうです。

方言名にも、関東地方、中部地方、近畿地方、四国地方にかけて、うしのはなぎ(牛の鼻木)、うしうちぎ(牛打ち木)、うしおいぎ(牛追い木)、うししばき(牛を鞭でうつ)、うしたたき(牛叩き)、牛殴り(うしなぐり)などがあります。

この樹の幹や枝は強靱な上に硬いので、鎌で刈ったり、鉦で伐ったりすると、鎌や鉦の刃が毀れたり、振れたり、摩滅したりする、ということから、かまつぶし(鎌潰し)、かまねじ(鎌振)、かまねぶり(鎌舐り)、なたはじき(鉦弾き)などの方言名が記載されています。

カマツカ(ウシコロシ)と高野山の特別な係わりについては、茨城県ご出生で、大正八年から昭和九年の間、高野山中学(現高野山高等学校)の博物担当教諭をお務めになった、沼尻好(ぬまじり・よしみ)氏が、高野山において、この木の幹に着生していた地衣類・エリオデルマ属の新種を発見され、東大の朝比奈泰彦博士によってヌマジリゴケと命名されたことです。絶滅種となつていますが、その標本は国立科学博物館・筑波研究施設(茨城県つくば市)に、現在も、保管されています。